

第一章

今日も大きな鳥籠の中から、外の世界を見つめる。

最近流行りの物語では、よくある話だ。とはいえ、実際にこの身に起こるとは、思ってもみなかったことだけれど。

仕事からの帰り道、交通事故に遭った衝撃で——突然、プレイしていた乙女ゲームの世界に転移してしまったらしい。

転移と同時にこの世界のものに作り替えられた体は、魔力供給の素質に恵まれすぎていた。

魔術師や魔物にとっては、喉から手が出るほど魅力的な存在だとか。

その特異体質のせいで、こちらに来るなり悪い人に捕まって、売られて――

—こうして、檻の中で暮らしている。

「ねえ。いつ、ここから出られるの？」

「おっと、相変わらず不満そうだな。お前さんみてえなのはな、こうして嚴重に『保護』してなきや、もっとひどい目に遭うにちげえねえんだからさ。感謝してほしいぐらいだぜ」

「これが『保護』のつもりなの？」

「そうとも。オレにとっちゃ大事な商品だからねえ、中でもお前さんは稀に見る逸材だからな。少しでも毛並みを良くするために、檻の中では何不自由なく良い暮らしをさせてやってるだろ？」

確かにこうして、三段セットのアフタヌーンティーまでついてはいるけれど。

私の唯一の話し相手である、眼帯をした全身モフモフの猫型獣人の彼は、紅茶を淹れるのだけは上手い。私を買った闇商人だけど。

別に手ひどい扱いを受けているわけじゃないし、欲しいものがあれば檻越しに融通してくれる。働くことに疲れていた私にとって、好きなだけごろごろ出来るというのは、悪くないけれど。

とはいえ。人権も何もあったものじゃない異世界で自由を奪われ商品扱いされていることには、どうしたって慣れようがなかった。

「でもよ、本当に出たいのか？　うちでもとびきり値の張る極上の品をご所望ってなると、高貴な魔術的血筋の名士か、あるいは大金持ちのド変態かって感じになるが」

「やだやだやだ、嫌すぎる……！」

そう。この世界の魔力供給とは、いわゆるその——セックスなどによってお互いの魔力を高める、というもので。

私を買われる、ということとは即ち。

十中八九、魔力供給目的の私を買った相手とかなりの確率でセックスをする羽目になるかもしれない、という最悪の図式が成り立ってしまう。

「……やっぱり、一生誰にも買われなくていいかも……」

「それは困るな。経費ばかり嵩んじまって」

ここが本当にあの世界なら、私の推しである国一番の大魔法使い、『エウリク・ハルクスヴァルナート』もいるはずなのに。

せっかくなら、何か奇跡的な展開が起こって、推しであるエウリクと出会って、恋に落ちたりしたいのに。

……そんな夢みたいなこと、あるわけないか。

「待って、その新聞……！　なんて書いてある!？」

「うん？『偉大なる大魔法使い、エウリク・ハルクスヴァルナート様の華麗なる凱旋』」

「ちよっ……！　貸して、よく見せて！」

紙面上の精巧な似顔絵を、食い入るように見つめる。

得意げにウインクをきめるその姿は、まぎれもなく推しの新規絵——もとい、彼がこの世界に実在する証。

私今、推しと同じ世界に存在してるんだ……！

「一目でいいから、生で見たい……！」

「もうそんな頃合いか。お前さんの望みは、存外早く叶うかもな」

「え？」

予感もなく——狭い部屋に、一陣の風が吹き渡る。

草木や花々の、目が覚めるように新鮮な香りが鼻先をくすぐった。

またたく間に、強力な旋風が巻き起こって——さっきまで何もなかったところに、真っ白で神秘的な化身が現れる。

その姿を視認して、大きく息を飲んだ。

「——やあ、初めまして。僕はエウリク。この国一番の大魔法使いである、エウリク・ハルクスヴァルナートだ」

「ほ、本物……!?!」

「もちろん。正真正銘の本物だよ？ さわって確かめてみるかい？」

「え、え……!! ぜひ……!! で、でもなんで……!?!」

握手会か何かのように、檻越しに差し出された手を握る。

端正にととのった顔立ちの、中性的で柔和な美しさとは裏腹に、節くれだつた手は男らしい。

陶器のように白くなめらかな肌は、想像よりも熱を持っていた。

「なぜって、それはね。——君を、迎えに来たんだ」

「——へ……？」

手の甲にひとつ、キスを落とされる。

瞬間、彼との間にある鉄格子が消え去り——私は、自由の身になった。

※

突然何もないところから風を起こして、推しが現れたかと思ったら。

彼はそのまま、あろうことか私を『買った』。

それも、目玉が飛び出るようなものすごい金額で。

私の住み処は、人権無視の鳥籠の中から、広々とした優雅なお屋敷へ。

迷子になってしまいそうな広大なお城で、私と推しの大魔法使い様である
エウリク・ハルクスヴァルナートの、二人だけの暮らしが始まった。

使用人などがいてもよさそうだけど、屋敷自体に魔法がかかっていたり、
使い魔の人工精霊などが仕事をしているから雇う必要がないらしい。

「誰かを雇うと面倒だからね。色々と」

「めんどろ……」

私も、何かと面倒をかけてしまいそうで心配になった。

何せ、鳥籠の中でお世話をされるばかりで、この世界のことに関しては全くの世間知らずだし。

「うん？ ……僕以外にひとの気配がないのは寂しいかい？ なら、愛らしい動物の使い魔でも用意しようか。とはいえ、僕を差し置いてあまり可愛がられても困るのだけど」

「いや、別に……お氣遣いなく。私のことは、気にしないで大丈夫ですから……！」

「おっと、堅苦しいのは抜きにしよう。君と僕の仲なんだ。礼儀など気にせず、ありのままの君で過ごして、接してほしい」

「……そういうわけには、いかなくはないですか？ だって私、あなたに買われて……」

「それから、金輪際敬語は禁止だ。僕は『君を買った』のではなく、『君の自由を買った』のだから。この屋敷で、僕のもとで、のびのびと過ごしても

らわなければ意味がない」

「……私の、自由を？」

「ああ、そうであればいいと願っている。僕に用意できるのは、限定的な自由であったとしても——そこが君にとって居心地が良いものであるよう、僕は誠心誠意尽くそう」

真剣な表情で私を見つめる瞳には、私の知らない思いが込められているように感じた。

「君のための気遣いなら、してもしたくないくらいだよ。誰かとともに暮らすなんてことは、僕が発生して以降、この身に受肉してから……前代未聞の、全く経験のないことだからね」

その言葉が、本当なら。

なんでよりにもよって、私と暮らそうと思ったんだろう？

「全知全能に近いと謳われる僕において、珍しくも未知の領域ということだ。こう見えて、とてもワクワクしているんだよ？」

「……………」

一方的に彼を推していただだけの私を、大枚をはたいて迎えに来てくれた理由も。

こうして一緒に暮らすことが楽しみだと、瞳を輝かせているわけも。

それだけの感情を向けられる心当たりがなくて、嬉しさよりも戸惑いが上回る。

（やっぱりそれだけ、私の魔力供給の素質がすぐれているから……？）

困惑にとらわれ押し黙っていると、エウリクが困ったように微笑んだ。
雪のように白い長い睫毛を伏せて、私の手を優しく両手で包みこむ。

高い背をかがめて視線を合わせ、私の考えていることを覗き込むようにじつと見つめた。

「……それにね。元が風の大精霊である僕は、人間の生態や感情といったものに疎いから……何か思ったことや感じたことがあれば、きちんと言葉にして教えて欲しい。僕の方でも、推察してその意を汲み取るように、最大限努力するけれど。君の言葉で語られた君の気持ち、僕への要望を、僕は聴きたいんだ。——どうか、覚えておいて」

どうしてこんなことになったのか、わからないけど。

ただ——目の前の彼が、本当に私のことを考えてくれているのだけは伝わってくる。

なんだか胸がいっぱいになって、潤んだ瞳を隠すように頷いた。

「……はい。——じゃなくて、うん……」

「良い子だ」

ほっとしたような息遣いが落ちて、頭を優しく撫でられる。

その温もりに触れた瞬間——『これから、ここが私の居場所なんだ』、と強く感じた。

幼い子にするように、ぽん、ぽん、と心地良いリズムで撫でられるたび。

未だ悪い夢みたいに思っていた異世界での日々が、急に現実として胸の中に降りおちていく。

まるで、魔法みたいに。

前世での『推し』に対する感情から——目の前の彼への恋心を、あらためて自覚することになった。

※

エウリクのお屋敷で暮らしはじめて、早くも一カ月。

彼のそばで知らないことを知っていく毎日、とても楽しい。

けれど。夢のような日々、実感が追いつかない。

何かと、理由を探してしまう。

私が、エウリクの隣にいていい理由。これから先も、ずっと一緒にいられる理由。

エウリクは未だに魔力供給の魔の字も出してこないけど、私に期待されている働きはきつとそれのはず。

「魔力供給……って。実際、どうやるんだろう？」

私なりに調べておこうと、エウリクに渡された魔法の入門書の数々をすみずみまで読み漁る。

しかし、たった一行だけの簡単な記述しか載っていない。

「うーん……『任意のものの間で魔力を譲渡、もしくは交換、増幅し、魔力を高めること』……。それはまあ、なんとなくわかるけど。もっとこう、具体的に……」

「——ずいぶん熱心に、魔法書を読み込んでいるんだね。感心、感心。もう

少し、上級者向けの書物も揃えようか？」

「わっ、エウリク!? 急に現れないで! 心臓に悪いから……!」

耳元で急にいい声がする、こっちの身にもなってほしい。

ばくばくする心臓を抑えながら振り向いたら、至近距離にととのったお顔があつて、息が止まった。

いたずらっぽく微笑むエウリクに、つい見惚れてしまう。

「先ほど口に出していたけど、魔力供給に興味があるのかい？」

「……ある、っていうか。まあ、あるんだけど……」

「そういうば君は、魔力供給の素質に異常に優れているね。だからかな？」

「そういえば……!？」

そんな半分忘れてたみたいな口調で言及されて、つい動揺してしまった。

「まあ、そのことはあまり重要でもない。君という魂が、ここにいる……それだけで十分さ」

「……重要じゃ、ない……？」

なんとなく、ショックだった。

実際は、それ以上に大事なことを言ってくれている気がしたのに——何も持っていない私の唯一の取り柄とっていい部分を、さほど評価してもらえなかったみたいで。

それも、他ならぬエウリクに。

どれだけ、魔力供給の素質に優れていたって。

他の誰にそう認められても、それが理由で求められても。全然嬉しくないどころか、むしろおぞましくてしかたがないのに。

エウリクにだけは——私を選んだ理由のひとつとして、誰にも負けない私

だけの存在意義として、認めてほしかった。

それから私は意地になって、魔力供給について調べ始めた。

「……ねえ、エウリク。女神を祀る神殿に、魔力供給を専門にしてるひとたちっていろいろがいるんでしょ？」

「ああ、神殿の巫女神官たちのことかい。確かにいるね。それが何か？」

「そのひとたちって、どういうことをしてるの？」

「ふむ。一口に魔力供給といっても、目的に応じてやり方は色々あるからね。疲れた人に元気を分け与えるような軽めのものから、霊肉の変質をつかさどる奥義めいたものまでさまざまだ。彼ら、彼女らはヒーラーでもあるし、秘められた素質を開花させる儀式を執り行う、深遠なる求道者でもある」

「ふーん……？」

必ずしも、『魔力供給Ⅱセックス』ってことじゃないのかな？　そうきいてたけど。

「エウリク！　今日の講義は……『魔力供給』、についてとかどう？」
「魔力供給によほど興味があるようだね。では、基礎知識から行こうか」

私の提案をのんで、エウリクはいたって真面目な講義をしてくれた。

エウリクはいつも、わかりやすいたとえ話を用いて教えてくれようとするけど、すぐに難しくて専門的な単語が並びだして理解が及ばなくなる。

「……このように、魔力供給という行為は便利でもあるが、リスクもある。君もね、誰かと、あるいは何かと——軽々しく、『魔力供給』なんてことをしてはいけないよ。どれほど興味があろうと、決して、ね。くれぐれも、肝に銘じておくように」

今のは、釘刺された？

遠回しに、私と魔力供給するつもりはないって示してる……？

私はエウリクのことを好きだから、そばにいただけで魔力がざわついて――エウリクを想って、ひとりで自分をなぐさめることだってあるのに。

私がどれだけ、必死にアピールしようと。

エウリクはいつこうに、私と魔力供給をしようとしなかった。

それどころか。手を取るとか頭を撫でるとかの軽いスキンシップ以外では、私に指一本触れようとしないうえ。

ただ、日々ともに魔法使いらしい営みをして、私にもわかるようにやさし

く丁寧に魔法を教えてくれるだけ。

大魔法使いである彼が、私を買った理由。

魔力供給係としてでないのなら、一体何のために？
ただ単に、魔法使いの弟子にするため？

でも、私にはあんまり才能がないみたいだった。

いつもの魔法のレッスンも、エウリクが教えてくれる難しい理論をいまいち理解できないまま、とりあえず実践してみる。

「こ、こう？」

能力を測るという碁盤みたいなものに手を置いて、魔力を込める。

淡い虹色の、花のような模様が浮かんだ。

「ふむ」

妙に冷めたような表情をするエウリクに、内心ショックを受ける。

失望された……？　あまりにも、魔法の才能がなくて？

呆れられてしまった、のだろうか。

「まあ、良い。これ以上は………そうだね。君には、貴重な回復用ハーブの魔術的精製を手伝ってもらおうか。前線に赴く兵士たちにとっての命綱だ、在庫はいくらあってもいい」

「……そんな大事な仕事、私がやってもいいの……？」

「もちろん。祈りの力こそが重要だからね、どうか心を込めて」

「ん……。——出来た、けど……。でも、エウリクが作ったものと色が違う……」

エウリクのは、美しく澄んだ湖のような色。私が祈りを込めたものは、わずかに虹色の光沢をまとった真珠のような色だ。

「作り手の個性が出るからね。では、今度は……そうだね。僕を想って、やってみてほしい」

「ええ？ エウリクを想って、って……。——こんな感じ？」

エウリクへの祈りを込めると、ほんのりと淡いピンク色に染まった。

「……祈りの仕方で、本当に変わるんだ……。効能も、変わったりする？」
「それはもちろん。——うん、いいね、とてもいい。上出来だ」

エウリクって、いつも褒めてくれるから。

本当のところはどうなのか、わかりづらい。

その綻んだ表情も、弟子の頑張りを微笑ましく思ってくれているだけかもしれないし。

「じゃあ。そんな感じで、この箱の分だけお願いするよ。無理せず、ゆっくりでいいからね。集中して」

「うん！」

私がひとつ生成する間に、エウリクはひとつ箱もふた箱も一気に終わらせてしまう。

とはいえ。天下の大魔法使い様でも、こんな地道な作業をやってるんだと思うと、なんだか親近感がわく。

ゲームでは、すべてを見通し根回ししているか、最後に美味しいところを全部持ってくようなチートめいた活躍をしていたから。

私に教えるときも、「魔法はひとつひとつの積み重ねが大事なんだ。だから、どんな仕事も丁寧だね」と毎回口にしていただけある。

「……これは、間違っても軍には卸せないな。——質が違いすぎる」

エウリクは独り言のようにつぶやくと、私の精製したハーブを別の箱に取り分けた。

（あ……。やっぱり、私が精製した分は、質が低すぎたってことかな。だしたら、材料無駄にしちゃったよね……）

私が失敗しても、エウリクは根気よく励ましてくれる。

こうして幸福な暮らしをさせてもらえてる恩返しも、何一つとして出来ない。

私に出来るとしたら……魔力供給係としての役目を果たすことだけ、だ。

大好きな推しであるエウリクのもとに引き取られて、誰より近くで暮らしているうちに。彼への恋心はいっそう強くなって、せつなくてくるしいくらいに育ってしまった。

だから——彼に魔力供給を求められることで、自身の存在価値と恋心を認められたいと、切実に思ってしまった。

※

そんな、ある日のこと。

屋敷内で、客人を初めて見た。

はっと息を飲むほど美しくて、スタイルの良い女のひとだった。
白い髪が神々しくも儚げな印象を与え、褐色の肌が色っぽい。

「いつもすまないね。また頼むよ」

二人して、同じ部屋から出てくるところだった。エウリクのかけた言葉に、
全身からさあっと血の気が引く。

——きつと、勘違いをしていたんだ。

魔力供給係として買われたと思ってたけど、たとえそうじゃなくても……
大切にされてる気がしたから。

……そうだよ。私みたいなちくりんの小娘に、欲情なんてするはずがないもん。あんな風に、色気たっぷりのきれいなお姉さんがタイプなんだったら、私なんて対象外に決まってる。

愛されてると感じるのだって、娘や妹みたいな存在としてとか……ペットの犬や猫みたいな感じなのかも。

何千年も生きる大魔法使いのエウリクにとっては、私なんて、きっと子供みたいなものだ。あのダークエルフのお姉さんの大人の魅力には、かないっこない。

……あの二人、セックス、したのかな。

『また頼むよ』、って何？ やっぱ、そういうこと？ いつもって、既に何回も？

彼女が身に着けてたあの蛇の腕輪は、魔力供給などを得意とする例の神殿の巫女のしるしだって聞いたことがある。

つまり彼女は、魔力供給のスペシャリストってことだ。ただ生まれ持った素質があるだけの私とは違う、その道のプロ。

だとしたら……私が勝てるどころなんて、本当にひとつもない。

私が出る幕なんてない、ってこと。

——私なんて、いないんだ。

存在理由を否定された気になって、やけになった私は、エウリクの屋敷を抜け出した。

屋敷には何重にも結界が張ってあるけれど、ひとつだけ心当たりがあった。一度見せてもらった『行きたいところに行ける鏡』の中の異空間に、思いきって飛び込む。

あの時エウリクは、目の前の私とエウリクを映し出すだけの鏡と私を見比

べて、意味深に笑った。てつきり、元の世界が映るのかと思っていたけれど、
って。

推し活くらいしか楽しみのない労働の日々より、大好きな人の側にいられる
今の方が、ずっと大切になっていた。

だけど。死にたくなるくらい恥ずかしい勘違いをしていたんだって思い知
らされた今——あそこには、とてもいられそうになかった。

たどり着いた先は、にぎやかな城下町だった。

ゲームのプログラムのシーンを思い出す。ヒロインが、攻略対象の王子や
騎士たちと出会うところ。

華やかなパレードの雰囲気、ふらふらと惹かれていく。

ふと、肩に手を置かれた。振り返ると——顔に傷のある男が、獲物を見つ

けたみたいニヤリと笑っていた。転移してきた時のトラウマがよみがえる。あの日も、こんな感じの人さらいに捕まって——そこに割って入った眼帯の彼に、交渉の末引き取られたのだった。

鳥籠の中は、不自由だけれど安全だった。だけど今度こそは、もつとひどい目に遭う？

エウリクのもとから逃げ出した、愚かな私は——今度こそ、魔力供給のための道具として、手ひどく使い潰されてしまうのだろうか？

全身が石化したように、恐怖で硬く冷たくなる。

呼吸すら出来なくなつた、次の瞬間。

あの日のように——突風が吹き荒れて、私の髪を舞い上げる。

ひどくなつかしい匂いのするそよ風が、やさしく私を包み込んだ。

「——何か用かい？　この子は、僕の連れなんだが」

「なっ！　なんでこんなところに、大魔法使いの野郎が……!?　——なんでもねえよ!!　じゃあな！」

「ふう。全く、油断も隙もない。……怖かったろう、平気かい？」

ふるえる肩を、そっと抱かれる。

この温もりに縋ってしまいそうになるから——私は、彼のそばに戻るわけにはいかない。

「……エウリク……はなして——！」

「いいや。絶対に離さない。君を、どこにも行かせるわけにはいかないんだ」

私を射抜く真剣な瞳は、怒りというよりもおそれや焦りを含んでいるよう

に見えた。

「さて。遊びの時間はおしまいだよ。君は僕と、あの家に帰るんだ」

※

「どうして、家出したんだい？」

「……………」

「だんまりかい。他のことなら、言いたくないなら無理にきくことはしない
と言ってあげたいけど……これだけはダメだ。どうして僕の元を離れよう
とした？」

どうして、って。

そんなの、言えるくらいなら出ていく前にエウリクを押し倒してる。

……そう。私はただ、ちゃんとぶつかることもせずに、こわくて逃げただけなんだ。

勝手に傷ついて、拗ねて、迷惑をかけてる。

「……ふむ。僕との生活が嫌になった？」

「………そんなわけ、ない。エウリクとの生活は、すごく気に入ってる」

「そう。なら良かった。では、なぜ？」

「……私に、この生活が相応しいとは思えないから。——だって、何の役にも立ってない」

私が断定すると、エウリクは困ったように頬を掻いた。

「そんなことは、ないんだけどな。役に立つとか以前に、僕は君が、ここに

いてくれるだけで十分なんだ。ともに暮らす相手として……」

「どうして？　なんで、私なの？　誰でも、よかったの……っ？」

「誰でもいいなんて、そんなことあるわけないだろう？　僕が君を、いくらで買ったと思ってる？　金額なんてどうでもいいけど、たとえどれほど貴重なものを引き換えにしても、僕には君を手元に置く意味があるんだってこと。どうすれば、理解してもらえるかな」

「……じゃあ、なんで——」

息を吸う。どうしても口に出せなくて、つもりに積もった本音を吐き出すように——私とエウリク二人きりの部屋に、なさけなく泣きそうな声が落ちる。

「魔力供給、しないの……？」

言ってしまった。

それは私にとって、告白にも等しい言葉だった。

「……それが、本当の理由かい？」

泣きそうになるのを堪えて、息を吸う。

「そう。私の存在価値なんて、それだけなのに」

「……僕が君のそんな考えを払しょくさせられたら、それがいちばんなんだから」

「……っでも、わかったの！ そんな働き、期待されてないって。だって、エウリクには……あのダークエルフのお姉さんみたいなお相手がいるんだもん。私なんて、用なしだって」

私の口から出た言葉を耳にして、まるで思ってもみななかったかのように目を丸くする。

「僕が彼女や他の誰かと、魔力供給のようなことをしていると誤解しているのかい？」

「してない、っていうの？」

「してないし、これから絶対にはしないよ。そもそも、自前の魔力で十分事足りる僕には、あまり必要のないことだからね」

「じゃあなんで、私を買ったの……!?」

存在を全否定された気分になって、動揺する。

私が縋ろうとしていた唯一の、エウリクの隣にいられる理由。それがきつぱりと粉々に砕かれて、目の奥がつんと痛んだ。

「——君は、本当にお馬鹿さんだなあ」

「……え？」

突然、エウリクの雰囲気が変わった。ただヒトの形をしているだけの、別の生き物みたいな。

穏やかな微笑みを浮かべた表情も、悠然とした佇まいも、いつもと同じエウリクをかたどっているのに。その、異様で妖しげな雰囲気だけが明確に違っている。

「僕と魔力供給、したいのかい？」

「……っ……なんで、しないの？　って、思ってるだけ——」

「そうじゃなくて。君自身が、本当にしたいのかどうかが訊きたいんだ。何よりも、重要なことだから」

高い位置から見下ろされて、観察するみたいに顎をすくわれる。

まるで、捕食されようとしているみたいに。

肉食動物にもてあそばれる草食動物のように緊張が走って——なのに、触れられた箇所だけが、ふわふわと甘く麻痺したようだった。

仕留められる苦痛をやわらげようと自ら上位存在に平伏するような、本能的な反応だろうか。

——エウリクと、魔力供給したいか？

そんなの、したいに決まってる。

だって、好きな人だから。触れられたいし、独り占めしたい。他の人なんかみないで。私だけが——なんて、大それた、欲張りなおねがいだと思ってた。

だから、どうしても言えないでいた。

「『自分の存在価値はそれしかないから』なんて自暴自棄な気持ちで、僕に抱かれることを望むなんて。そんなことじゃ、僕の思う幸福の形とはほど遠い」

「……エウリクの思う幸福の形、って？」

「僕が、君に与えたいと思っていたもの。それを与えることで、君から引き出したいと思っていた感情。人間の感情の機微はよくわからないけど、人間の君を愛するのならなるべく寄り添ってあげたいと思って、ゆっくりあたためていくつもりだったんだけれど……少々、まどろっこしかったかな。慣れないことをするものじゃないか」

物思わしげに、エウリクはひとつため息を吐いた。

「仕方がないから、わからせてあげることにしよう。君も、それがお望みなんだろう？」

「……何するつもりなの……？」

「うん？ 愛する君と、相思相愛になる方法だよ。魔力供給目当て、なんて思われなくなかったからね。触れたくても我慢していたのに——君が台無しにするんだもの。だからもう、遠慮はしないでおくよ」

「え、えっ？ 待っ……んんっ！」

ずっと感じていたもどかしい距離が嘘みたいのに、唇同士が触れた。

「っ、ふ……♡ん、ん♡あ……っや♡ん♡♡」

やわらかなくちびる同士がふれあうだけで、くすぐったいような甘いしびれが走って、腰がはねてしまうのに。逃げられないように腰を抱かれ、長い脚が割り入ってくる。

歯列をなぞられて、舌と舌を絡ませられて——甘やかすように、わからせるようにくちづけられる。

戸惑いながらも、嬉しくて。こちらから舌をうごかせば、エウリクが満足

そうに笑った氣配がした。

「んっ、ふ、う……♡ん、あ……♡んっ……♡ん」

奪うように与えられたキスはどこまでも深く、受け止めるのに精一杯だった。らしくなく余裕がない姿に、求められている氣がして胸がいっぱいになる。

私が欲しかったものが、たった今惜しげもなく与えられている。

キスをする直前、エウリクが言っていたことが本当なら――

私って……エウリクに、愛されてるのかな？

ひょっとして。信じられない、けど。

逞しい男のひとの腕が、私を抱き上げる。とけそうに熱い下腹が彼の脚のつけ根に擦れて、快感を拾った。

応じるように片脚を腰に絡めて密着すると、おなかに硬いものが食い込んだ。

「っ……♡ん♡んん……♡ん」

私に興奮してくれてるんだ、という確かな証に、身体が熱くなる。

酸欠でぼうつとした頭を労わるように撫でられて、いつもと変わらないその手つきに安心する。

けれど私を見つめる瞳は、見たことのない欲を湛えた、男のひとのものだった。

「っ……エウリク……」

いとおしむように髪を梳き頬を包む手に手を重ねて、ゼロ距離で見つめ合う。

私のこと、好きって言ってる。たぶん、ぜったいにそう。

半信半疑で受け止めきれずにいた愛の言葉が、実感をもつてしみわたるみたいだった。

いつも穏やかで落ち着いてて、考えを悟らせない瞳が——私のせいで、こんなにも濡れた色と欲に染まるなんて。

私の欲しかったものが、私の見たかった景色が、今ここにある。そう思うと、もう止められそうになかった。

「本当に、いいね？」

「……うん——」

脳内を、肌の下を。静かなさざなみのように寄せてきている快感が、やがては私を飲み込んで丸ごと塗り替えてしまう予感がした。おそれと期待をなймаぜにして、今から私を抱こうという彼に身を委ねる。

——どうしよう。おかしくなりそう。

抱き合ったまま、ベッドの上に瞬間転移する。

「お互い、初めてだからね。入念に、優しくするから。安心してほしい」

「……うん……」

不安と期待を抱いて、すがりつくようにロープを握りしめる。

ちゅっと音を立ててキスをされて、幸福感に胸がふわふわした。

膝の上に後ろ向きに抱っこされて、甘えるようにぎゅうっと抱きしめられる。

「エウリク……」

「いわゆる魔力供給と呼ばれるものは、魔力の循環を促し快感を最大限高めることで、互いの生命力を増幅することが重要なんだ。もちろん、今からするのは、れっきとした愛の行為でもある」

その唇が首筋をなぞるたび、肌が栗立つ。うっとり名前を呼べば吸い付かれて、ちくりとした痛みを与えられた。

いつだって優しくて、私を傷つけることなんてないひとに与えられる、痛みも傷も。

特別な愛と執着の証のようで、どこかとうとうと思えた。

「でも、そうだな。僕から離れようとしたことは許せないから……ちよつとしたお仕置きも兼ねることにしようか」

「えっ……あ、っ♡ふ、う………♡」

やさしく耳を食まれて、じんわりと甘い痺れが頭蓋全体に広がる。輪郭をなぞられて、真ん中の突起を舌先でつつかれると、腰がふるえた。

拘束するように抱きしめられた腕の中で抵抗しようとしても、全くもってびくともしない。

体格と力の差を感じさせられて、なぜか体の中心がきゅんとした。

おしおきなら、多少嫌がってもやめてもらえないかもしれない。こんな風にされるがままになってしまおうと思うと、頭がぼうつとして——私って、ひよつとするとエウリクにいじめられるのが好きなものかもしれない、なんて思った。

「あっ……♡まっ、て……ふ、う……っ♡」

キスをしながら、大きな手が包み込むように胸に触れる。

マッサージされるみたいになやわやわと揉まれると、じんわりとした心地良さがあつた。

ふと胸のあたりが楽になったと思ったら、ブラウスの下の下着がなくなっていることに気付く。

魔法で消すとか、大魔法使いの能力をこんな風に使わないでほしい。

「心臓には、魔力が集まるからね。こうして撫でながら活性化してあげると、

「感度が上がって気持ちよくなれるはずだよ」

「そん、な……の♡っん、ん……♡」

たった一枚の柔らかな布越しに揉みしだかれると、手のひらに擦れた中心が快感を拾ってしまう。ゆるく芯を持ったそれを、カリカリ♡と両手の爪でいじめられる。

「あ……♡や、だ……♡やだ♡んっ、んっ♡」

血流と魔力の流れがよくなっているせいかな、あつという間にじんじんしてきて、どうしようもなく疼いてしまう。

縫るように、エウリクの腕を握りしめる。

「ふふ。ささやかな抵抗も、たまらなく愛らしいね。君も——僕のことを好きでいてくれたのなら、僕に抱かれたと思ってくれていたなら。きちんと、言ってくればよかったのに。黙って家出なんかせずに、ね」

舐めて、食んで、羞恥心を煽るようにいやらしい水音を立てて。耳どころ

か、脳髓までもしやぶられてるみたいに錯覚する。

丁寧 に耳を攻められながら、あさましく硬くなりつつあるそれをつままれ
ては、指でそっと押し込まれて、じつくり育てられるみたいに愛でられる。
ゆっくり、ゆっくり、快感を教え込まれて、欲情を炙られるみたいな手つ
きで。

「あっ♡いえ、ないい……♡そんな、の……♡や♡あ♡それ、きもちい……
♡だ、め♡だめえ……♡やあ、んっ♡」

敏感になった神経の束が分布するちいさな球体を、指の腹で執拗にこす……
♡♡こす……♡♡とまあるく撫ぜられる。たまらなくきもちよくって、喉を反
らして感じてしまう。

「ふ、うっ♡ああ♡あっ♡そ、れえ……♡らめ……♡だめ、なの……♡あ、
んう♡」

おしつけたお尻に、硬いものがごりっ♡と当たって息を飲んだ。

「だから、ね。今日のところは、たくさんおねだりさせてあげようと思って存分に、素直になってくれていいんだよ？」

すっかりその気になって勃起上がった乳首を、ぴん、ぴん♡と優しくつま弾かれて、そのたびにびくびくっ♡と身体をふるわせる。

「ふ……♡や、だ……♡おかしくな、る……♡なっちゃう、う……♡」

早くも雌に堕ちつつある私は、力なくエウリクにすがるしかなかった。

「あ……♡ふ、う……♡う、ん♡あ、あ……♡っ……♡」

さわさわ……♡とフェザータッチしてから、まわりをくるくる……♡されて、触れるか触れないかの絶妙な加減でたっぷりと焦らされる。

「んっ、やつ♡あっ♡ああ……♡っ♡っね、え♡も、やだっ♡やら♡からあ♡もお、これやあっ……♡」

あおられた期待に応えるように、カリカリ♡とつよめにこすられるのを繰

り返すと、永遠にくすぶり続ける快樂におかしくなってしまう。

もうとつくに、下着がどろどろになって貼りついているのがわかる。

布越しのもどかしい絶妙な刺激をさんざん味わわされて——にぶい快感に浸かった頭が、その先を求めてやまなくなる。

「っ、あ……♡はじめて、なのに……っ♡こ、んな♡乳首ぜめ、とかあ……っ♡ひどい♡ひどい、よお♡こんなの……っあ♡あっ♡」

「えっ。ひよっとして、ダメだったかい？」

「だめ♡だめに、きまつてる……♡のに、い♡あ……♡」

どうしよう。きもちいい。きもちいい、よう♡

エウリクを責め立てる訴えとは裏腹に、内心はくせになりかけてる。

「ふむ、すごく善さそうだけれどねえ。やり過ぎたのならごめんよ。もう、十分かい？ 直接、触って欲しい？」

なんてことなさに投げかけられたその言葉に、期待と絶望が同時に襲ってくる。

「う、あ……♡ちよく、せつ……？ そんなあ……♡そんな、の♡……っ……♡」

とろとろと蜜を垂らして脚の間をよごしながら、きゅうきゅう♡とうごめては、触れられるのを今か今かと待っているのに。

びんびんになって腫れ上がって、快楽に炙られたままの胸の先端を、まだ、直接触ってもらってもない。こんなに焦らされて執拗に責められたせいで――口では嫌だって言いながら、身体はまだまだ欲しがってる。

私ばかり余裕を奪われっぱなしで、切ないほどの恋しさに涙がにじんだ。

「っ……ちよ、くせっ♡さわって、え……♡おねがい……♡」

「うん？ どっちをだい？」

「っ……どっち、も……♡っあ♡や、だあ……♡いじわる……っ……ふ、う♡っ♡」

抱き直されて、両脚を蛙のように開かれる。すりすり……♡と割れ目をやさしく撫でられて、うっとり目を閉じた。

「ふふ、僕にさわってほしくて泣き出しちゃったのかい？ あんまりにも可愛いから、たっぷりサービスしてあげよう♡」

「うん……♡すき、エウリク……♡」

「僕も好きだよ。愛してる」

唇からこぼれた愛の言葉を、性急で真剣な響きでもって返される。

ちゅっ♡と耳へキスされて、ようやく胸元をあらわにされた。先端が濃いピンク色に色づいていて、我ながら卑猥で——ただ、荒い吐息を漏らす。

空気に触れ、いっそうの期待に上を向いた乳首に、エウリクの手が近づい

た。飢え乾いたひとみに、くちびるをぱくぱくさせる。

「っ、ふ♡うう♡っん♡んっ、んあっ♡やつ♡やああ……♡ああっ♡あ、んっ♡ん♡ん♡」

くにくに♡こりこり♡と執拗に親指と人差し指でこすり合わされて、ずう
つとつづく甘い快感が、たえまなく脳を侵した。

「っあ♡や、だっ♡っそん、な♡され、たらあ……っ♡っちくび、とれちやう♡っふ、う♡やあ♡ああ♡」

「気持ちいい？」

「んっ……♡きもち、いい♡きもちいい♡」

「やめてほしいかい？」

[illegible]

はしたなくねだる私にこたえて、手を止めないでいてくれる。

油断していたおまんこに、エウリクが欲望の証をぐっ♡と押し付けてきた。渴望していた刺激が、ほんのすこし与えられただけで——ビクビクンっ♡と、身体を甘く貫くような痙攣に襲われて、子宮がきゅうきゅう♡と甘くきしんだ。

「っあ♡ひうっ♡あ——♡っん、あ……♡」

「おや。ひよっとして、達してしまったのかい？」

「……♡っは、あ……♡ちが……♡イってない、もん……♡」

おっぱいだけでイっちゃったみたいになるのがいやで、ぼうつとした頭をふるふる♡とふって、必死に否定する。

うん、だいじょうぶ。ちよっと、甘イキしちゃっただけだから。

とん、とん♡と下からやさしく打ちつけられて、甘くにぶい快感の余韻が下腹部にひびいた。

「んっ♡っん……♡エウ、リクがっ♡じらすのが、わるいの……っ♡」

詰るように見つめても、ねだるような視線にしかなくていい気がした。

「はいはい、そうだね♡……うーん、さすがの僕も、そろそろ余裕を失くしてしまいかもしれない。そんな顔をされたらね」

「っ……♡なら、はやく、さわってえ……？　ちゃんと、イかせて……♡」

ふらつく身体を一生懸命ひねって、エウリクの耳をかぷりと食む。

つたない誘惑でも効き目があったのか、欲に濡れた瞳が揺れて、雰囲気が変わった。

「スカート、持ち上げられるかい？」

黙ったまま、快感で力の入らない手をどうにか動かして、スカートをからげる。こんなときこそ魔法を使ったっていいのに、本当に趣味が悪いと思った。

次の瞬間、目の前に大きな鏡が出現して——ひどい発情顔をさらした私が、なさけなく眉を寄せる。

従順にやってみせた私をほめるように頷いて、ゆっくりと、下着を下げられる。

いやらしく糸を引くのを、わざわざ見せつけるように。そっと顔を背けたら、つかまえられてキスされた。

「ん……♡ふ……♡えう、りく……♡♡」

よどみのない手つきで脚を抱えられて、汗を掻いた太腿にひっかかってくるくと丸まったショーツを片側だけ抜かれた。

脱がされたことを強調するように、ぐちゃぐちゃになったあわれな布が右の太ももにまわりついたままであることが、羞恥心を刺激する。

「っ……♡や、あ……♡やだ……♡♡」

「ほら、見てごらん。僕と魔力供給したくて——こんなにもえっちになっちゃってる君の姿♡」

鏡越しに暴かれた私の中心は、目も当てられないくらいいいやらしく熟れていた。

ぱくぱく♡きゅうきゅう♡と快感を待ちわびてうごめいていて、雌の本能を否が応でもわからせられてしまう。

お尻に敷いた、服越しでもはつきりと上を向いているのがわかるエウリクの雄の部分を、埋められるのを期待している。

「エウリク、だって……こんなに、してるくせに。っん♡あ……っ♡」

腰を前後に揺らして、つたなく抜くようにする。その息がかすかに乱れて、してやつたりという笑みが浮かんだ。

このいけない悪戯に私自身も気持ちよくなってしまっ、つい夢中になる。たとえば白いローブを汚してしまうことになっても、エウリクのせいだから

しかたない。

「っ……こーら。僕にさわられたいんじゃないのかい？」

「あ……さわりたい、です……♡ごめん、なさい……♡よごしちゃって……」

「まあ、いいけれどね。芳醇な魔力を含んだ愛しい君の蜜がしみ込んだところで、加護になるだけだから」

「か、加護って……」

「どうせなら、僕自身にいっぱい刻み込んで欲しいところだけど」

魔法で跡形もなく綺麗に出来たとしても、その事実が消えないと思うと恥ずかしくなった。

腰の動きを止めても、私のそこはきゅう……♡きゅう……♡と物欲しげにうごめくのをやめない。

「……っ……♡エウリクも、脱いでよお……」

「うん？　僕の裸、見たいのかい？」

ぱっと服を消して、華奢な印象に反して分厚い上半身をあらわにする。
眩しくて、どぎまぎした。

「……儚い見た目のくせに、けっこう筋肉ついてる……」

「好きに鑑賞してくれて構わないとも。触ってくれてもいいし、ね？」
「ん……」

お許しが出たので、ぺたぺたと手で触れてから、そっと抱きついた。

素肌同士が触れ合って、ひどく安心する。心地、いい。ずっと、こうしてくっついていたくなる。やみつきになりそう。

髪の毛をかき混ぜるように撫でられて、うっとり瞳を閉じる。

「いいかい、さわるよ」

「……っ、うん……あ……♡」

エウリクの彫刻みたいに美しい手に、発情してひくひく♡しているそこを、いじられちゃってると思うと。とろとろ……♡と蜜をあふれさせて、その手をもっと汚してしまう。

背徳感に逃げようとした腰を、背後からがっちり固定された。

「ああっ♡っや、だめえ……♡——んんっ♡」

「だって、こんなにさわってほしそうに主張してるから。ぱんぱんにふくらんで、気持ちよくなりたがってるんだ。可愛いね♡」

ほんとうに恥ずかしいくらい目立ってしまったている芯を持った球体を、指先でやさしくっん♡と突かれて息を飲んだ。

検分するようにこりこり♡されてから、蜜をまとわせた指でにゆるにゆる♡と扱かれる。脳が焼けるくらい、強烈な快感におそわれた。

「あっ♡やあっ♡うう、っん♡は、あ……っ♡ああっ♡あっ♡」

「自分でするとき、君はここばかり弄っていたよね？　きもちよさそーに♡」

「!?　な、なんで、しってるの……っ♡なんで……っん、んう♡あ♡あ♡」

「この国の領土の中は、僕の庭も同然だからね」

オナニーを見られてたという驚きも、くちくち♡くちゅくちゅ♡とクリトリスと割れ目をいじくられる快感で塗りつぶされてく。

「ねえ。どんなことを考えてしてたんだい？　可愛い声で、僕の名前を呼んでただろう♡妄想の中で、僕にどんなことをされてた？」

それすらもバレていたことに、顔が熱くなった。

「や、だ♡いえ、ない……っ♡ん、やあ……っ♡」

「ダメだよ、言っでごらん？　これは『お仕置き』だからね」

「お、しおき……？　あ♡あっ♡やあ……っ♡」

「そう。ひょっとして、僕に言えないような、ものすごくエッチなことだっ

たりするのかな？　もしそうなら……ちゃんと聴いた上で、期待に応えないといけない」

「そんなことお……♡っあ♡ない……♡きたい、いじょう、だから……っ♡あ♡だめえ、それ……♡」

甘やかすように、指の腹でくるくる♡しこしこ♡と弄られる。うつとりと目を閉じて、与えられる快感を堪能した。

甘えるように凭れかかった頭にキスを落とされて、顎先をくすぐられる。「そうかい？　ならいいんだが。……でも、ちゃんと僕のことだけ考えていただろうね？　誰か別のひとに抱かれる想像をしてたら承知しないよ」

「ん、エウリクだけ……っ♡っねえ、エウリク、は……？　する、の……っ？　ひとり、で……♡」

「するよ。君のことを考えて、ね」

「っ……私のこと、だけ？」

「もちろん。君以外の何で興奮しろっていうんだい？」

「私の、えっちなこと……かんがえるの？」

「そうさ。君がけなげに僕を想って自分を慰める姿を見ながら、いつかこうして実際に触れられる日を心待ちにしていた」

「……っ……」

エウリクが、そんな風に思ってたなんて。信じられなくて、うれしくて――身体が、ありえないくらい熱くなった。

そんなそぶりなんて、全く見せなかったくせに。影では私のこと、そんな目で見てたんだ、って。

「だけど、実物は想像を遥かに越えてる。僕に触れられて感じて、きもちよさそうに乱れる君をもっと見たくって……つい、焦らしちゃうんだなあ♡ごめんよ♡」

「『ごめんよ♡』って、可愛くいわれても……。ん、ん……♡」

両脚をめいっばいひらいて、甘えるようにそっと腰を浮かせた。もつとエ

ウリクの指を感じていたくて、与えられる快感をあますことなく拾い上げた
くて貪欲になる。

「出来事だけでなく、君の頭の中も常時覗けたらいいのに。そうすれば、
持ちがすれ違うこともなくなるのにね」

「それは、やだ……っ♡は、あ♡あ……♡」

もったいぶるように、じれったいくらいの刺激を与えられて。

「あ♡それ、すきい……♡くりとりす、ゆびでたん、たん♡ってするの、
すき……♡」

「これかい？　ちゃんと言えてえらいね♡好きなら、いっぱいしてあげよう
♡」

くち♡くち♡とやらしい音をさせながら、たん♡たん♡って優しくたたき
つけられるのを繰り返される。敏感になりきったそこが、快感で焼けてしま
いそうにきもちいい。

にゅこ♡にゅこ♡しこ……♡しこ……♡くりくりくり♡って。追い立てら

れるように、じわじわと快感が高まっていくな。

「う♡あ♡あ♡だ、め♡きちや、う……♡っ……♡っ、え……？ あ……♡」

急に指を止めるから、与えられるはずだった快感に追いつくように、かく♡と腰を揺らしてしまっていた。はしたなさに顔が熱くなるけれど、高まりかけた感度が高まらず甘い余韻に夢中になって、腰を押しつけるのをやめられない。

「ん、う……♡なんね、とめるの……？ いっぱいしてくれて、いったのにい……♡う♡あ……♡」

「うん？ だって、可愛いから♡きもちよくなりたくって、僕の手に一生懸命腰を押しつけてる君が♡」

「やあ……♡」

ゆるくなでられて、抗議するようにクリトリスが甘くひくつく。物足りない

い刺激に欲を煽られて、甘えるように涙がにじんだ。

「このまま、僕の指でオナニーしてくれてもいいよ？」

「やだ……♡」

「ほら、僕もお手伝いしてあげるから♡」

「お、てつだい……？ —— あっ♡ああ……♡」

斜めに抱え直されて、ずっと放置されてた胸に吸い付かれる。たまらなく甘い快感が抜けて、恍惚とした吐息が漏れた。

さっきさんざん弄られていたせいですぐにその気になってしまつて、甘い疼きがじわじわとぶり返してくる。じんじん……♡とにわかには血流が増して、貪欲に快感を享受しようとするそこを、れろれろ♡と舌でいじめられて。甘やかすようにちゅっ♡ちゅう♡としやぶられれば、腰がくねってますますエウリクの手を汚してしまう。

「ふっ♡うう♡だ、めえ♡そん、なあ♡ぺろぺろ、らめ……♡っああ♡す、っ
ちゃ……♡あ♡あっ、んん♡」

熱く濡れた舌で乳輪を丹念になぞられて、つん♡と突かれるだけで期待が高まる。ざらざらとした舌先に、神経を炙られるように撫ぜられて――びりびりするくらい、たまらなくきもちがいい。

そのままそっと吸われると、声のない悲鳴がもれた。

「あ……っ♡や、あ……♡あ……♡」

ぬるぬるした唾液で濡れたくちびるにはむ……♡とやさしく食まれて、ぼうつとしてくる。

こんな風に、甘くやさしく愛でられるのと、激しく責め立てられるのを繰り返されて、ぐずぐずになりたい。エウリクの手で与えられる快楽に、だめになってしまいたい。

そんな甘い囁きが脳内を支配して、理性の抵抗を軽々ととびこえていく。

息を飲んで、欲のままに、きこちなく腰を動かしはじめる。少し上下にうごかすだけでも、たしかな快感が伝わって、どうすれば気持ちよくなれるの

かを予感した。

細かくふるわせるようにしたり、しゅっ♡しゅっ♡くちゅっ♡くちゅっ♡と激しく上下に揺らしてみたり。次第に、大胆になっていく。

私のがんばりを肯定するように、エウリクが指先をくい♡くい♡と不規則にうごかすから、ますます翻弄されて夢中になってく。

すっかり腕にすがりついて、両手を重ねて、媚びるようにねっとり♡と腰をまわりつかせていた。

「うん、じょーずじょーず♡まるで、踊り子みたいだね。エッチな腰遣いだ♡」

「んっ……♡ん♡っ……♡ほんとに？　じょうず？」

「うん、とつてもね。これは、後でごほうびをあげないと。とっておきのね♡」

頭を撫でてほめてもらえると、うれしくって、甘えるように見上げる。く

ちづけられて、幸福感にふわふわした。

「ん……♡」

「あとで、僕の上に乗ってみるかい？ 君には才能があるようだから」

「あ……♡さい、のう……？」

囁かれた声には欲望がまわりついていて、おなかの奥が疼いた。腰がしびれて、重たくなって——早くこの私の熱い中心を貫かれて、エウリクにめちゃくちゃにされたい。

「っ……♡」

はち切れんばかりに主張しているエウリクのを、足先でそっと踏みつける。仕返しのようにつたない動作で撫でつけられ、椅子にしている太腿がこわばったのがわかった。

「……♡エウリクは、へいきなの……？ こんなに、なってるのに……♡」

先端と思しきところを足の指できゅっ♡とすれば、白いローブにくつきり

と浮かび上がる卑猥な形がビクン♡となったのが伝わった。

「……っ♡……そうだね。全然、平気ではないんだが……っ、こら♡」

「……っあ……♡そう、なのっ？ んん♡」

曲げた指で乳首のまわりをくるまれて、くにくに♡と刺激される。イタズラした足をとがめるように、クリトリスの根元をきゅっ♡とつままれて、恍惚のため息がもれた。

「こんなに、じらしたりするのって……よりよい、魔力供給のため……っ？」

「いいや？ それもあるけれど、君はただでさえ初めてなのだし。入念に慣らした方がいいと思うんだが……もう半分は趣味というか、僕自身の下心と
いうか。端的に言って欲望かな？」

「エウリクの、欲望……」

それを、私に対して抱いてるの？

そんなの、そんなのって。早く、そのぜんぶをぶつけられちゃいたい。何もかもをうけとめたい。そう、気持ちかはやる。

「僕の手で甘く乱れる君が、すごくいやらしくて、可愛くて。たくさん焦らして、理性を溶かして……本能のまま、僕を求めて、快楽に堕ちる君の姿をもっと見たい、って思ってしまうんだ。つい、ね」

瞳を覗きこまれて——すべてを見られて、暴かれて、愛されてしまう気がした。

もっと気持ちよくなりたくて、エウリクを興奮させたくて。彼の言うとおり、みだらでえっちな私の姿を、その聡明な頭脳に消せないくらいに焼きつけてほしいと思った。

「だけど、そろそろ本気を出そうか。美味しそうに仕上がった君を、きちんと満たしてあげたいからね」

「っ……まだ、本気じゃないつもりなの……？」

もうずいぶん快楽に浸されつつあるのに、これから先どうなってしまおうだろうか。

身体に走ったふるえと痺れは——まぎれもなく、期待だった。

「っあ、え……っ？」

ぽすりとシーツに寝かされる。ぐっと開かれた脚のまんなかにエウリクが陣取って、欲情を感じる笑みを浮かべた。